



TITLE:

花山の日食観測陣容決定す

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 花山の日食観測陣容決定す. 天界 1936, 16(181): 242-244

ISSUE DATE:

1936-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167222>

RIGHT:

花山の日食観測陣容決定す

花山天文臺では、實に永い前から待つてゐた此の6月19日の皆既日食の観測のため、いよ々々昨1934年の初めから具體的な計畫を立て、若干の理想案を作ると共に約4萬圓の豫算を文部省に要求することゝした。

ところが、上記の豫算は(他の諸大學から提出の日食豫算と共に)、國家非常時の折から、1935年度の政府豫算に計上されず、漸く翌1936年度の政府歳出豫算中に其の一部が計上されることゝなつたが、之れも今年初頭、議會解散のため、駄目となり、只、僅かに又其の一小部分のみが、来る5月の臨時議會に提出されるらしいのである。

こういふ状態であるから、吾々は観測計畫については、昨年以來、只、最小限度のものに縮小の方針を採らざるを得ないことゝ覺悟した。しかし其れでも、こんどの如き交通や運搬の便利な土地で珍らしい皆既日食が見えるのであるから、經費節約のため、新器械の購入等は極度に切りつめるにしても、

なるべく多數のメンバーが観測地に出張し、何とかして直接に貴重なる體驗を得たいものだと思ひ、先づ、花山天文臺に平常から持つてゐる器械を主として、昨1935年8月末には9ヶの観測隊を北海道の各地に派遣する計畫を立てた。(急報 173)

しかるに、昨秋以來、滿洲やシベリヤ方面の地理や社會事狀が判明するに至つた。之れは吾人の研究心を大に刺激した。何となれば、こんどの日食は、地圖を擴げて見れば、誰にも判斷が出来る如く、北海道よりも、滿洲やシベリヤの方が非常にコンディションが良いのであつて、例へば、

土 地		皆既日食の高度	皆既の繼續時間	皆既の時方時
シベリヤ	オムスク市	48°	2分12秒	9時30分
”	バイカル湖の西	57	2分31秒	12時
滿洲國	北部(中央)	52	2分22秒	14時05分
日 本	北海道(北見中央)	39	1分58秒	15時55分

上の如き状態であるから、若し事狀さへ許せば、何とかして、北海道よりも、進んで滿洲や、シベリヤへ観測に行きたいのは萬人の一致する希望である。

故に、吾人は、此の際、多少の冒険を敢へてするとも、大陸へ進出する可能性を積極的に調査研究して見たいと考へた。そこで、ロシヤ側の事情については、取り敢へず、プルコワの中央天文臺長 B. P. Gerasimovic 博士と交渉を開始し、又、滿洲方面は、昨秋、自分が北支へ出張した序でを以つて、新京に立ち寄り、種々の調査をした。此等の豫備的調査は、其の後、大體、順調に進捗し、殊にロシヤのゲラシモキチ博士からは屢々厚意ある書面や電報を貰ひ、彼國の學界が大に歡迎してくれるらしい様子であつたので、吾々も一時は大變喜んだ。そして、特に、年來の希望であるコロナ變動の實否を研究する目的のため、ロシヤ國內に少くとも3ヶ所(成るべくは、カウカソス地方に1つ、オムスク市に1つ、カンスク市附近に1つ)と、滿洲國アムール河畔に1ヶ所、北海道に1ヶ所とし、合計5ヶ所に同一器械を据え付ける計畫を定め、今年初から、木邊氏の手を煩はして、口径20種、焦點2米の反射望遠鏡を製作することにした。

ところが、社會の狀勢は、最近に至つて急變し、國內には2.26事件其の他の事あり、露滿國境の事狀も可なり切迫してゐるものゝ如く、更に又、3月に至つて、ゲラシモキチ博士からは、ソ國に於いては、外國の觀測隊の獨立幕營は禁ぜられる故、是非、ソ國の觀測隊と合流されたし、¹、²都合により、オムスク以東に外國觀測隊の滯留を許さず³等々、甚だ不可解なる通報がやつて來るやうになつたので、遂に今4月に至り、ロシヤ行きを斷念し、結局、下の如き觀測計畫を決定するに至つた。(急報 206)

花山天文臺皆既日食観測隊 總指揮 山本敦授

第1観測隊 北海道枝幸村 總監督 竹田助教授

第1班 コロナ及び閃光スペクトル撮影 柴田、荒木(九)兩理學士擔當。30種シロスタト使用。

第2班 部分食及びコロナ直接寫眞撮影 稻葉理學士、荒木(健)氏擔當。15種シロスタト使用。

第2観測隊 北海道中頓別村 總監督 小山理學士

第1班 コロナ光度觀測 小山理學士、木邊氏擔當。40種シロスタト使用。

第2班 コロナ變動寫眞觀測 第1號機使用。堀井理學士擔當。

第3観測隊 北海道遠輕町 高城氏主任

コロナ變動寫眞觀測 第2號機使用。

他に、ハイデ赤道儀を据え付け、コロナの長時間撮影を計畫す。

第4観測隊 満洲國呼瑪 公文理學士主任

コロナ變動寫眞觀測. 第3號機使用.

尙ほ、この満洲國呼瑪へは、上海自然科學研究所の囑託を受けて、京都帝大の天文教室より、荒木助教授、栗原講師、上谷理學士の一行が出張する筈であるから、同勢は可なり賑やかとなる見込みである。

花山よりの大小諸器械は何れの方面へも5月15日を期して發送される筈であるし、観測者各自は5月20日より6月10日頃までの間に、それ々々観測地に到着する豫定である。(山本 1936. 4. 20)

6月19日の日食時刻表

	初 虧		復 圓		食 分
	時 刻	方 向 角	時 刻	方 向 角	
呼 瑪	12 : 36	280°	15 : 5	102°	皆 既
新 京	12 : 43	293	15 : 17	92	0.82
仁 川	13 : 57	303	16 : 26	84	0.68
長 崎	14 : 14	310	16 : 33	80	0.62
岡 山	14 : 15	304	16 : 34	85	0.69
大 阪	14 : 16	302	16 : 35	87	0.71
京 都	14 : 16	302	16 : 36	87	0.72
名 古 屋	14 : 18	301	16 : 35	88	0.74
東 京	14 : 20	298	16 : 38	91	0.79
仙 臺	14 : 17	294	16 : 35	95	0.86
札 幌	14 : 9	286	16 : 28	101	0.96
旭 川	14 : 9	285	16 : 27	102	0.98
稚 内	14 : 5	283	16 : 24	103	(皆
中 別	14 : 7	283	16 : 25	103	
枝 幸	14 : 7	283	16 : 25	103	
紋 別	14 : 9	283	16 : 27	103	(既
網 走	14 : 11	283	16 : 27	103	
根 室	14 : 13	283	16 : 29	103	

(委しくは神宮本曆、天文年鑑、理科年表を見られたし)。